

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-54

学校名・団体名	岡崎市立山中小学校現職研修部
HPアドレス	http://www.oklab.ed.jp/weblog/yamanaka
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	生活に生きて働く「書く力」の育成
〈活動・研究の意義、目的〉 「書く」ことは、話すことや聞くことと同じように一生続く活動である。自らの思いを目に見える形に書き表すことで、考えや思いはより確かになり、書かれた文字を通して他者に伝わる。子どもたちの学習を支える「書く活動」の研究を始めて2年。これまでの研究実践の中で、書かれた言葉だけでなく、書き手の思いまでが文字に込められて伝わる場面を何度も目の当たりにし、「書く力」の重みを実感してきた。 自分にとっても人にとっても整った文字が書ける「書写力」、思いや考えを的確に表す「語彙力」、「相手」と「目的」を意識して書き分ける「活用力」を育てることで、子どもたちの学習に取り組む姿勢も学び合いも高まることが分かってきた。この3つの力を兼ね備えることは、学校生活のあらゆる場面に生きて働き、さらに将来的な社会生活でも生きる「書く力」であると捉え、本研究を継続している。	

1 研究のねらいと仮説

■目指す子ども像＝生活に生きて働く「書く力」をもつ子

- ・人にも自分にも優しい文字が書ける子<書写力>
- ・文字や言葉のもつ意味を正確に理解し的確に使う子<語彙力>
- ・場に応じた書き方ができる子<活用力>

■研究主題 生活に生きて働く「書く力」の育成

<仮説1：書写力>

書写の授業や視写タイムにおいて、一人一人が自分の課題に合った練習ができるようにし、見つけた原則や習得した技能を持続できるように指導すれば、書きやすさ・読みやすさの両方を兼ね備えた力（＝書写力）がつくであろう。

<仮説2：語彙力>

国語科を中心に、文字や言葉に興味をもたせ語彙を増やすような指導をし、言葉を吟味させる活動をすれば、自分の考えにふさわしい言葉を使う力＝語彙力がつくであろう。

<仮説3：活用力>

学習活動において、相手意識・目的意識を明確に自分の考えを書かせたり、分かりやすくまとめさせたりして発信する場を設定すれば、場面に合った書き方や筆記具を選ぶ力＝活用力がつくであろう。

2 実践の紹介

① 授業研究（「書写力」を育む授業）

指導案に「書く力」を育てるための手立てを示し、全ての授業研究の機会に「書く場面」に焦点をあてた実践を行った。また本校の卒業生であり、美文字王子として多数の書籍の執筆、講演会、テレビ出演等で活躍される、横浜国立大学の青山浩之先生に3度来校いただき、ご指導いただいた。研究理論についてのアドバイス、問題解決学習としての書写授業など、多くのアドバイスをいただいた。

ア 4年 書写「画の方向（麦）」

「麦」の2つの左払いに注目し、「夏」「反」「冬」「名」などの例から「2つの左払いが下のほうに並んでいるときは終筆の方向が近づく」「それ以外では、終筆の方向が広がる」という文字の原則を見つけた。右の写真は、授業者が作った『変形自在文字板』で、左払いの方向を変え、払いの方向で字が変わったことを視覚的に確認している場面である。



イ 5年 書写「筆順と字形（成長）」

練習の場面では、隣同士で書くところを見て、アドバイスをし合う。このとき、本時の学習課題とともに、練習で気をつけたい個人課題に焦点化して友達に見てもらい、評価してもらった。



来校した青山浩之横国大教授に手本を示していただく場面では、子どもたちは先生の書く姿を食い入るように見つめた。

ウ 6年 書写「ひらがなの筆使いと文字の中心」

ひらがなを書くときの筆使いは、つながりや力の抜き方が難しい。タブレット端末を教科書にかざすと、専用のアプリケーションが起動し、教科書のお手本を動画で見ることができる。（東京書籍の書写の教科書に対応した「東書AR」を起動させる。動画は、青山浩之先生が書いている）必要に応じて動画を見たり、自分が書くところを撮影して振り返ったりして、筆遣いのコツをつかんでいった。



エ 低学年の水書き（2年「画のつきかたと交わり方」）

毛筆の学習は3年生から始まる。毛筆へのアプローチとして、低学年では水書板と絵筆（丸筆）を使って水書きを行う。「払い」「折れ」「はね」などきちんと書けているかがはっきりと分かる。また、毛筆のように大きく太く書けることは、子どもたちのやる気も高めた。本単元では、「日」と「口」を比べ、「日」の4画目と「口」の3画目が、縦面のどこに接しているかを比べ、「口の中に何かあるときは、縦画が出るように接する」ことを見つめることができた。



行事や総合的な学習の時間における書く活動

② ア 学校行事を通じた書く活動

○人権標語・他

人権週間にあわせ、特別活動の取り組みとして全校で人権に関する標語を作成した。学級の代表に選ばれた作品は、作った本人が筆ペンで清書し額に入れて校内に掲示した。

他にも、敬老会の案内状を全校児童が分担して書く、卒業へ向けて6年生にメッセージを書くなど、機会をとらえて、気持ちや思いも届ける手書き文字を味わう活動を行った。

○全校書き初め大会

3年生以上の全員が体育館に集まり、1月の3学期始業式に全校書き初め大会を行っている。各学年の代表が、舞台上で席上揮毫を行い雰囲気を盛り上げる。練習時間を取った後真剣なまなざしで清書を書く。仕上げた作品のうち、金賞に選ばれたものは、岡崎市の作品展へ出品される。

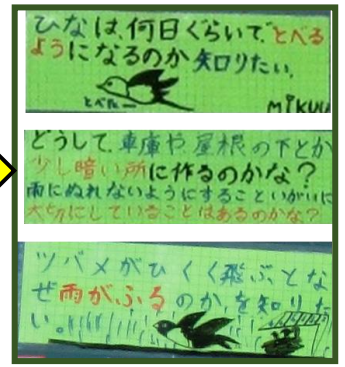
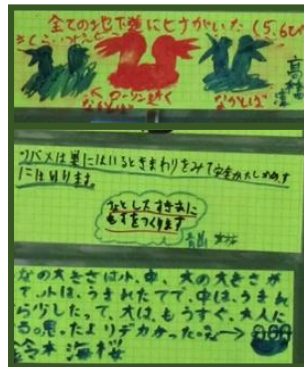


イ 総合的な学習の時間における書く活動

本校の「書く力」は、国語、書写に限ったものではない。「活用力」を伸ばし、書く力が発揮される場として、総合的な学習の時間に力を入れた。その中で、話し合うために書いたボードの文字を工夫することや、ポスターの言葉を吟味するなどを授業として設定し、相手意識を明確にして書かせるようにした。

○4年「アイデアボード」

4年生「ツバメと友だち」で、学区のツバメの巣を調べ、子育てを観察した。毎日の観察結果を持ち寄り「ツバメミーティング」を行ったが、写真左のようにボードに書かれた文字は読みづらく情報交換も進まない。そこで、分かりやすく書く方法を見つける授業を設定し、文字の大きさや色、カットなどについて話し合った。次の「ツバメミーティング」では、写真右のように変化が見られた。読むことで情報交換も進み、話し合いも深まった。



○5年「伝統芸能「デンデンガッサリ」を伝える」

5年生は、学区に伝わる伝統芸能「デンデンガッサリ」の歴史を調べ、保存会の方から所作を学ぶ。秋には、山中八幡宮本殿をお借りして発表した。未来へ受け継ぐ必要性を感じた5年生は、4年生に思いを伝えたいとワークショップでの発表を考えた。ポスターを作成し、さらにそのポスターをより分かりやすいものにするにはどうしたらいいか話し合いを持った。レイアウトや言葉の吟味、筆記具の選択など文字や言葉を意識した話し合いができた。



③ 文字や言葉が身近にある学校環境

校内の各掲示板も、文字や言葉を飾った。

一階の掲示板は季節ごとに全校児童の小作品を掲示した。二階の掲示板は子供の俳句、敬老会で出した招待状の優秀作品、年賀状コンクールの作品など、書く活動の成果を展示している。

各教室の入り口には短冊に俳句やことわざ、今日の一言など、子供が書いた文字を飾る。また、東西2ヶ所の階段には、校長先生が書いた二十四節気の手紙をはっている。

作品掲示には、購入したスキャナーが大変役立った。

